追手門学院大学社会学部紀要
2014年３月30日，第８号，13-31

二元論の行方――バタイユ的弁証法

髙　橋　紀　穂

Sur un dualisme —— une dialectique bataillenne

Kiho TAKAHASHI

要　約

本稿の目的はバタイユの普遍経済学の成立の過程をヘーゲル哲学とファシズムという側面から考究することにある。

バタイユは『呪われた部分』を1949年に発表し、そこで「普遍経済学」というものを開示する。しかし、彼はそれ以前からその思想を少しずつ形成していた。そして、その形成にはヘーゲル哲学とファシズムの影響を切り離すことはできない。本稿では、バタイユがそれらからどのように影響を受け、自身の議論を構築したのかを考える。

第１節ではバタイユの1930年の論文「低次唯物論とグノーシス派」、そして第２節では1932年の論文「ヘーゲル弁証法の基底への批判」を各々取り上げ、バタイユがヘーゲルの唯物論をどのように理解・受容したのかを考える。そして、前者の論文ではヘーゲルの唯物論が「去勢」されたそれとして考えられ、後者の論文ではヘーゲル哲学が革命の先駆的思想であると思考されていることを示す。第３節ではバタイユの思考する「異質学」を取り上げ、それがファシズムについての分析へとつながりゆくことを示す。第４節においてはバタイユがコジェーヴによって再びヘーゲル哲学に出会い、この哲学とモースの理論を結びつけ、普遍経済学を考究するに至ったこと、そしてまた、それがファシズムを乗り越えんとする思想につながったことを明らかにする。「おわりに」においては、小括ならびにバタイユの弁証法とヘーゲルの弁証法についての新た問題提起がなされる。

キーワード：弁証法、ファシズム、ヘーゲル哲学、普遍経済学

はじめに

ジョルジュ・バタイユの思想はその初期から首尾一貫性を保っている。とりわけ、彼の思想には、それが構築された初期から二元論的世界観がはっきりと見られる。しかし、詳細に見れば、バタイユ思想も不動のものではない。そこには他の思想家と同様に紆余曲折や迷いや闘いがある。1930年代、戦火の波が押し寄せよせていたヨーロッパは政治的にも混乱をきわめていた。その時期に思想を構築したバタイユがいかなる逡巡もなく独自の理論にたどり着いたことはありえないだろう。とりわけ、ファシズムはバタイユにひとつの問題をもたらした。そしてそれはまた彼に政治活動と思想の深化をもたらした。

一方、バタイユはフランス社会学、ヘーゲル、ニーチェ、フロイト等の議論から影響を受けている。各々の理論をバタイユは独自に吸収しているが、ヘーゲル哲学の受容に関してはバタイユ自身にとってもかなりの困難をともなった。このことは彼の著書を見ればうかがい知ることができる。バタイユがコジェーヴの講義に出席し始めるのは1934年からであるが、彼は、それ以前にもヘーゲルに言及しているし、コジェーヴとの出会い以降はさらなる頻度において、様々な論考において、何度もヘーゲルに立ち戻り、解釈を深めつつ吸収し、そして、自身の理論を練り上げている。これらのことを考え合わせると、1930年代はバタイユにとっては、ヘーゲル哲学と同時に、ファシズムとも闘う時代であったと言えるであろう。そして、両者は時を同じくして普遍経済学の中で消化されるであろう。

本稿はこのことを主題にしている。すなわち、バタイユの思想においてヘーゲル哲学とファシズムが普遍経済学とどのように関係するのか、という問題を明らかにすることを目指している。

バタイユが普遍経済学の全貌をあきらかにするのは1949年に発表される『呪われた部分』においてである。しかし、彼はそれ以前から普遍経済学的な思想をじょじょに構築している。ここでは、ヘーゲル哲学とファシズムという側面からその議論の構築の過程を明確にする。そうすることにより、ヘーゲル哲学とファシズムの普遍経済学への影響関係を浮き彫りにする。

1

ジョルジュ・バタイユはアレクサンドル・コジェーヴのヘーゲル哲学の講義に出席する以前、少なくとも、二つの論文においてヘーゲルに触れている。

一つは1930年に雑誌「ドキュマン」に発表した「低次唯物論とグノーシス派」（Bataille［1970c＝1974］）。もう一つは1932年に雑誌「社会批評」に発表した「ヘーゲル弁証法の基底への批判」（Bataille［1970d＝2009］）である。

ここでは、この二つの論文に見られるバタイユの思想を同時期のバタイユの論文を参照しつつ

明確にしていこう。

まず、「低次唯物論とグノーシス派」を取り上げる。

そこではタイトルどおり、唯物論とグノーシスとの関係が論じられている。基本的なことを言えば、グノーシスとは、一世紀ごろに生まれた宗教思想であり、その中心にあるのは二元論的宇宙論と考えられている。そこにおいては、善＝神的、精神的領域、悪＝物質的領域と捉えられた上で、人間の内部にある神的領域と宇宙の神的領域が同一であることを認識することが救済と考えられた(1)。バタイユはこのようなグノーシスの思想の中に、活動原理としての物質という概念を見る（Bataille［1970c：223＝1974：103］）。それは自立した存在としてある。さらに、それはその自立性を通して精神のロゴスと対立している。このグノーシスの二元論をバタイユは物質と人間的観念および理性という二元論へと読み替え、そして前者に「低次のもの」という位置づけを与える（Bataille［1970c：225＝1974：106］）。こうして、バタイユはグノーシス派の思想を低次の物質と高次の理性をめぐる弁証法的思想と考えることになる。もちろん、バタイユの議論の主眼は「低次」の重要性を照射することにある。

1930年前後のバタイユの論考のいくつかには、同様の二元論的思想がいくつも見られる。たとえば、バタイユが雑誌ドキュマン第三号（1929年６月）に発表した論文「花言葉」にも同様の主張が見られる。そこで、バタイユは、美しいバラも花びらをむしった後は「下品な」子房が一つ残るだけである、ということを指摘する（Bataille［1970a：176＝1974：41］）。そればかりではなく、花は「不潔でねばつく根」をもたねば存在しえない。なぜなら「花」とは「下肥の悪臭から養分を汲み取って」いるからである（Bataille［1970b：176＝1974：42］）。バタイユはここでも「根」のような「下方［le bas］」のものに注目する。そして、その下方のものと結びついてのみ「花」は存在することができると考える。

同様の主張は同雑誌第六号（1929年11月）に発表された「足の親指」にも見られる。そこでバタイユは、人間を支えているのは「泥にひたされた」足であることに目を向ける。そして、実際には体内で血液は「上から下へ、そして下から上へと同量流れ」、これは、「不潔なものから理想的なものへの、そして、理想的なものから不潔なものへの往復運動」を意味している（Bataille［1970b：200-201＝1974：72］）。にもかかわらず、人間は上方へ向かって成長して行き、人間生活が一つの「上昇」だけであるかのように「執拗に空想」し、足を「低劣な器官」と見なし、それに対して「立腹」する。

ここまでで理解できるように、「花言葉」と「足の親指」に共通する主張とは、バタイユの低次のものに対する注目と、そこからなされる上方の価値、すなわち観念論への批判である(2)。そして言うまでもなく、これは「低次唯物論とグノーシス派」においても見られるものである。

他方、彼の時代にこのような思想が新しいものであったにしても、現代のわれわれから見れば、バタイユがここで論じていることに目新しいことは何もないように見える。文化の底辺に注目する思想、あるいは、デュルケムの聖俗理論の一変種にしか見えない。しかし、このバタイユの議

論を彼のヘーゲル哲学との関連で考えれば、見逃せない部分があらわれる。

「グノーシス」論文へと戻ろう。

そこにおいて、バタイユは、この二元論とヘーゲルの弁証法をつなげる。つまり、低次の物質を捉えるグノーシス派の思考こそがヘーゲルの弁証法を生み出したと考える。

> 「ところでヘーゲル哲学は、ヘーゲルの時代の古典的哲学に劣らず、非常に古い形而上学的概念を出発点にしているように思われる。つまりそれは、形而上学が奇怪きわまる二元論的宇宙発生論と結び合わされ、まさにそれ故に奇妙に低俗なものとされていた時代に、とりわけグノーシス派の人々によって発展させられた概念から出発しているのである」（Bataille［1970c：220-221＝1974：99］）。

しかし、他方で、バタイユは、ヘーゲルの考えるグノーシスを、「去勢された」グノーシス、と批判する。

> 「ヘーゲルの学説は何よりもまず並はずれた完璧至極の要約の体系であるから、グノーシス派の本質である低俗の要素がそこでも見出されるとしても、要約され去勢された状態にすぎないことは明らかである」（Bataille［1970c：221＝1974：109］）。

低次の物質に力を見出し、そこに、新たな可能性を感じるこの頃のバタイユにとって、ヘーゲル哲学は生ぬるいものに映ったのかもしれない。にもかかわらず、バタイユは、続けて、次のように言う。

> 「ヘーゲルにおいてこうした要素がその思想において果たしている役割は、破壊的な役割のまま維持されている。たとえその破壊が、思想の構築に必要とされているものであるにしても、である。だからこそ、ヘーゲルの観念論に弁証法的唯物論が（思想がそれまで持っていた役割を物質に与えることによって諸価値を完全に転倒させながら）取って代わった時、そこでの物質が抽象的なものではなく、矛盾の源泉となったのである」（（Bataille［1970c：221＝1974：109］）。

マシュレはこの言葉から、この時期のバタイユが宿敵ブルトンと同様、弁証法的唯物論を「奉じていた」と指摘している（Macherey［1990：232＝1994：334］）。それはその通りであろうが、ここでは、さらにもう一つ指摘すべきことがある。それは、この時点からバタイユが、ヘーゲル哲学の内部の「低次のもの」という破壊的要素に気づいている点である。

先走って言えば、バタイユはやがて「低次のもの」を「異質なもの」と、そしてさらには「聖

なるもの」から「至高性」という言葉に呼び変えていくのであるが、彼はこれらがヘーゲル哲学の内部にあると、コジェーブに出会う以前に考えている。さらには、これが思想の構成をもたらすモーターであることにも気づいている。コジェーヴの講義は後者の点を強く展開することにより、バタイユを打ちのめすであろう。さしあたり、ここでは30年代前半にすでに見られるこのようなバタイユの思想を確認しておこう。

2

続いて、論文「ヘーゲル弁証法の基底への批判」について見ていこう。

1931年、ボリス・スヴァーリンによって雑誌「社会批評」が創刊される。1932年、バタイユはこの雑誌にレイモン・クノーとの共著形式で「ヘーゲル弁証法の基底への批判」と題された論文を発表する。この論考は共著形式ではあるが、実際にはほぼバタイユ一人の手によるものだったと言われている(3)。

一見してわかるのが、この論考がフランス内部における階級闘争を後押しする思想をあらわしているということである(4)。他方、バタイユは、その根拠づけを、マルクスからヘーゲルの弁証法にまでさかのぼり、そこに見出そうとしている。バタイユは、ヘーゲル研究をなしたハルトマンの区別する「現実の体験に根ざした主題に関わる」弁証法と「言葉としての価値しか持たない主題に関わる」弁証法のうち、前者に注目する（Bataille［1970d：277-278＝2009：274］）。つづいて、その弁証法に「自然」あるいは「物質」を結びつける。これはマルクスとエンゲルスが考えたことでもあった。

> 「彼ら〔マルクスとエンゲルス〕は（中略）自然という研究領域を選び、弁証法的な見方に自然の一般法則の特徴を与えたいと野心を持っていた（後略）」（Bataille［1970d：279＝2009：276］〔　〕内引用者による補足）。

とりわけ、エンゲルスはマルクスの死後、単独で弁証法の根底に「自然」を見出そうとした。しかし、彼は結果的にはこれを断念する（Bataille［1970d：282＝2009：280］）。バタイユはこの挫折の原因をエンゲルスの「前提の中にある」と考える（Bataille［1970d：280＝2009：278］）。なぜか。エンゲルスは弁証法を観念的に捉え、その観念を自然の中に見ようとしているからである(5)。自然あるいは物質は観念とは相容れないもの、すなわち、観念の否定であるからだ。よって、自然と観念を結び付けようとする思考は必ず挫折する。バタイユはヘーゲルの自然の捉え方を次のように説明する。

> 「ヘーゲルによれば、ほかならない自然自身が「概念を実現できない無力さによって哲学に

限界を設定している」。哲学に、ということはすなわち、事物たちの生成を弁証法的に構築することに、ということだ。ヘーゲルにとって自然は、観念の挫折なのであり、ひとつの否定なのである。反抗であると同時に無意味なのである」（Bataille［1970d：279＝2009：277］強調はバタイユ）。

ヘーゲルはこのように自然を観念の「挫折」「否定」「反抗」「無意味」という言葉で表現する。しかし、バタイユはこのヘーゲルの言葉を肯定的に受け取る。つまり、自然とは観念に反逆する何ものかである、と[(6)]。他方、エンゲルスは弁証法を観念的に捉え、その観念の根底に自然を置こうとした。だからこそ彼は挫折した。さらにバタイユは言う。

「ヘーゲルの弁証法は、「実験的な長い歴史」という言い方でエンゲルスが考えていた歴史とは正確に一致しない思想の流れに関係している。事態を正面から見る必要がある。そしてヘーゲルの弁証法にはヘラクレイトス、プラトン、フィヒテとは異なる先駆者の思想があることを認めなくてはならない。じっさい、ヘーゲルの弁証法は、グノーシス派、新プラトン主義の神秘思想などの思想の流れに、そしてまたマイスター・エックハルト、ニクラウス・クザーヌス枢機卿、ヤーコブ・ベーメなどの哲学の亡霊たちに、より本質的に関係しているのである。ところでヘーゲルが摂取し取り入れた限りでのこれら亡霊たちの思想は、当然のこと、自然科学の分野には適用されえないし、たとえこの分野にさまよいでても、寄生的な場しか見出せないのだ」（Bataille［1970d：282-283＝2009：282］）。

ここでバタイユは再びヘーゲルとグノーシスを結びつける。しかし、上記引用におけるヘーゲルとは、先に見た「グノーシス」論文におけるヘーゲルとかなり違った捉え方をされている。「グノーシス」論文において、ヘーゲルは物質を理性へと還元する者として否定的な捉え方をされていた。しかし、上記引用において、ヘーゲルは自然を理性の、つまり「科学」の外部のものとして提示した哲学者として、肯定的に捉えられている。

さらに、バタイユは「哲学の亡霊たち」を引きずるヘーゲル思想へ注目する必要性を説く。

「じっさいには、ヘーゲルが取り入れた限りでのこの思想は、きわめて豊かな形態で維持されているのであって、諸社会の生や革命を表現することが求められているときには、適切なものとなっている。或る意味では唯一適切なものになっている。／とはいえこの適切さを維持するためには、宗教上の先駆者がどうであれ、ヘーゲルのこの弁証法の思想が完全な形で維持されることが必要なのである」（Bataille［1970d：283＝2009：282］強調はバタイユ）。

こうして、ヘーゲル思想は、革命の先駆的思想とされる。

続いて、この革命の先駆的思想たるヘーゲルの弁証法の中に、バタイユは、理性、理念、概念ではなく、「生きられた体験」の中で作動する弁証法を見つけることになる（Bataille［1970d：287＝2009：289］）。「生きられた体験」を示す弁証法の例として、バタイユはフロイトの精神分析を例に挙げている。子供は父の死を欲するがそれは反転して自己の去勢の欲動となる。しかし、この否定性は必然的に息子が父親の地位を獲得することを促す。ところが、それが達成されるのは息子が自身の否定性を破壊したときでしかない（Bataille［1970d：287-288＝2009：290-291］）。ここには否定の否定がある。つまり、弁証法がある。この弁証法を作動させる否定性とは「自然」に根ざしたものだ(7)。そして、この弁証法は「生きられた体験」を示す。バタイユはこの「生きられた体験」としての弁証法を階級闘争に引き写す。

> 「マルクス主義の歴史観における弁証法の根本的な諸テーマは（中略）生きられた体験に根ざした弁証法に属している。そしてこれらのテーマが否定する力あるいは否定する行動を、歴史の進展の要請する目的としてではなく手段としてつねに援用して戦術を組み立てているという点である。このような弁証法の特徴を研究するのは重要なことだ。と言うのもこのような否定的なものの援用こそが、明らかにマルクス主義の柔軟さと力強さの条件になっているからである。つまり、この援用こそが（中略）マルクス主義を現代のプロレタリアートの生きたイデオロギーにしている当のものなのである。この場合のプロレタリアートとは、ブルジョワジーによって否定的な実存に差し向けられ、革命の活動――新たな社会の基盤を今からすでに構成している活動――に身を捧げている階級のことである」（Bataille［1970d：289-290＝2009：293］）。

バタイユはドキュマン論文における「花言葉」および「足の親指」から「下方」と「上方」、「花」と「根」、「頭」と「足」といった表現において、すでに独自の二元論、あるいは弁証法的議論を展開していたと言えるだろう。そして、それは「グノーシス」論文や「ヘーゲル」論文において、観念論に対する批判とマルクス主義を接続することにより、じょじょに研ぎ澄まされたのである。

一方、バタイユはここから、さらに、「異質学」と呼ばれる二元論的思考を展開させる。

3

バタイユは「異質学」という思考を1932年あたりから構築し、それを「サドの使用価値」という論文にまとめる（Bataille［1970i＝2001a］）(8)。

バタイユの「異質学」とは、これまで見てきた二元論的議論をさらに発展させたものである。「サドの使用価値」において、バタイユは人間文化に「異質なもの」と「同質なもの」との二項対立

を見る。「異質なもの」とは日常において還元不能、もしくは還元困難なものである。バタイユは例として「糞便」・「死体」・「供犠」などをあげる[9]。これらは「肉体や精神を排出［excrétion］の状態」におくものでもある。他方「同質性」は「獲得」を特徴とする。人間は土地や作物やその他のさまざまなものを獲得し、それらを自身と同質なものとする。宗教的な領域においては異質性が見られるが、この領域は異質性を「優越的」なそれと「劣等的」なそれに分割し、やがて、前者を同質性に取り込んでしまう（Bataille［1970i：61＝2001a：253］）。しかしこのようなさまざまな同質化の運動からは「還元不可能な廃棄物が出来し」それは「排出の方向へ向かう」（Bataille［1970i：61＝2001a：252］）。

ここからバタイユの議論は革命へと移される。そしてそれが「同質なもの」をくつがえす「異質なもの」によって引き起こされる、と議論される（Bataille［1970i：66-69＝2001a：261-267］）。

ヘーゲルには言及されてはいないが、これらの議論を見れば、バタイユが独自の二元論を構築していることが分かるだろう。おそらくは、異質学にいてバタイユはおもに、マルクス、フロイト、そしてデュルケムやモースの理論に依拠している[10]。バタイユはこれらの議論を参考にしながら、自身の社会変革の思想を構築していたと言えるであろう。

一方、「異質学」の構築を前後して、時代はドイツとイタリアでファシズムの嵐が吹き荒れるものとなった。ここにバタイユ理論はかつてない危機を迎えることになる。なぜなら、ファシズムは明らかに「異質なもの」だったからである[11]。他でもなく、バタイユ本人がこのことに気づいていた[12]。もちろん、他の者からの指摘もあった[13]。そこで書かれたのが「社会批評」33年11月号と34年３月号に発表された「ファシズムの心理構造」――政治あるいは国家を心理的要因から分析するという当時としては奇抜な論考――であった[14]。

ここでは先の異質学の議論からファシズムが分析される。つまり、バタイユは異質学を政治と国家の問題へと広げる。

ここでは、すでに「サドの使用価値」で取り上げていた「異質なもの」の二種、すなわち「優越的」な異質性と「劣等的」な異質性が、デュルケムが議論した「聖なるもの」の二つの性質の助けを借りてより説得的に説明される（Bataille［1970f：350＝2001a：31］）。そして、前者がやがて強権的なものと結びつき、それが王権となることが示される。この王権が出来上がると、それは劣等的なものを排除し、同質性と結びつく（Bataille［1970f：352＝2001b＝34］）。ここで、「同質＋優越的異質」対「劣等的異質」の形が出来上がる。バタイユは古代の王権をこのように考えている。さらに言えば、近代国家もこの形式のもとに入るだろう（Bataille［1970i：60-61＝2001a　251-252］）。しかし、ファシズムはこの形態を取ってはいない。それは復古した王権ではない。吉田裕が指摘するように、その最大の違いは、ファシズムが劣等的な下方のものと結びつき、そこから直接力を得ているところにある（吉田［2001a：126ff］）。バタイユは次のように言う。

「ファシズムは貧困階級とのあいだに、緊密な結びつきを持ち、そのために、ファシズムの

形成は、古典的な王政的社会と深く区分される。なぜなら、後者は、至高の力域が劣等的な階級から多かれ少なかれ切り離され、接触を失くしているという性格を持つからである。しかし、ファシズム的な統合が実現され、既成の王政的統合（非常に高いところから社会を支配するという形態の）に対立するとき、前者の統合は、単に出自をさまざまにする諸権力の統合、階級の象徴的な統合であるばかりでない。それはさらに、異質的な要素が同質的な要素と統合すること、厳密な意味での至高性が国家と統合することでもある」(Bataille［1970f：362＝2001b：55-56］)。

劣等的な異質性もまた、優越的なそれと同じく同質性に奉仕している。これがバタイユの分析である。しかし、この分析は分析者であるバタイユに重大な問題をつきつける。なぜなら、バタイユにとって、一方で、異質性こそが人間の「存在理由そのものとされる衝動」(Bataille［1970i：66＝2001a：261］）だからであり、他方では、この衝動を抑圧する同質性あるいはその社会こそが人間を「隷属的」存在にするものだったからである（Bataille［1970i：64＝2001a：258］)。今やこの二つが結びついている。こうして、バタイユは、自身の考える異質性をファシズムからすくいあげる方途を探さねばならなくなる。この問題はやがて拡大し、バタイユ自身に、いかなる社会を目指すのか、といった疑問さえもたらしたであろう。しかし、論文「ファシズムの心理構造」においてこれらの問題に明確な答えを差し出しているようには見えない。

バタイユはこの時期、これらの問題をたずさえたまま、様々な文章を発表し、さまざまな政治活動にも身を投じる[15]。そのひとつに、1935年秋に宿敵ブルトンと手を結んで組織した「コントルアタック」という政治団体があった。そして、この団体が発表した文章において、バタイユはファシズムの「武器」を今度は自分たちが「利用すべき」という考えを示す。

「私たちが確認したところでは、ほかのいくつかの国々で、ナショナリストたちの反動勢力は、労働者の世界が作り出した政治的武器を、自分たちに有利となるよう利用した。だから、私たちは、今度は私たちがファシズムの作り出した武器を使用する番である主張する。ファシズムは、人間に根底的な、情念の昂揚と熱狂へと向かう渇望を利用する術を心得ていた」(Bataille［1970g：382＝2001b：122-123］)。

ブルトンがバタイユを「シュルファシスト」と呼んだのは、おそらくはこのような思考をバタイユのうちに見て取ったからである[16]。そして、すぐさま（1936年春に）「コントルアタック」は崩壊することになる。エモネはこの頃のバタイユについて次のように言う。

「「ドキュマン」の自然の弁証法は、「社会批評」の生きられた体験の自立した弁証法になったが、それは「コントルアタック」の非－弁証法へと、つまり、沈黙と暴力へと行き着く。

／それゆえ、バタイユにとっては、この袋小路からの出口をはっきりさせることが緊急課題となる」（Heimonet［1990：75-76］）。

このとおり、バタイユはここで、二元論から、そして弁証法から離れている[17]。その理由として、この時期の政治的状況が――他の同時代の知識人と同じく――彼に過激な思考を促したと言えるかもしれない。だがしかし、バタイユはすぐに弁証法的思考へと戻る。それは経済学の形をとってあらわれる。

4

1933年の１月、バタイユは「消費の概念」を雑誌「社会批評」に発表する（Bataille［1970e＝1973］）。時期的に見れば、この論考の発表は先に取り上げた「ファシズムの心理構造」よりも以前である。このことは何を意味するのだろうか。

バタイユは論考「消費の概念」においてやがては著書『呪われた部分』に結実する思想――実際、単行本『呪われた部分』の巻末に置かれるのがこの「消費の概念」である――を展開している。つまり、社会における「無条件の消費」あるいは「非生産的消費」がいかに人間の実存と共同体の成立に食い込んだものかがモースの贈与論をもとに論じられる[18]。そして古代ローマの富者の喜捨、キリスト教の無為の消費がそれと同根であることが示される（Bataille［1970e：311-314＝1973：277-281］）。その後、近代のブルジョワ階級においては、「非生産的消費」が生産性へと還元されてしまっていると批判される。

「切り詰めた消費というこの屈辱的概念に呼応したのが、17世紀初頭からブルジョアジーの手で育まれた合理主義的諸概念であるが、これらは卑俗な意味での、つまりブルジョア的意味での、ひたすら経済的な世界観という以外に意味を持たない。消費への憎悪がブルジョアの存在理由であり、正当化である」（Bataille［1970e：314＝1973：280-281］）。

最後には、奢侈の形態が貧弱になればなるほど、貧者と富者の差異が広がり「残酷な仕組み」となり、この状況はやがて階級闘争を導くと述べられる（Bataille［1970e：314ff＝1973：281ff］）。

バタイユはここでファシズムについて明確には触れていない。ということは、このような経済学的分析とファシズムの分析は別に考えられていたことになるのだろうか[19]。あるいは両者を結びつける思考がまだ完成されていなかったと言うべきであろうか。先に述べたように、この後、バタイユはブルトンと「コントルアタック」を結成し、最終的には「シュルファシスト」と呼ばれる思考にいったんは近づくことになる。これらのことを考え合わせると、この頃のバタイユの

思考は錯綜の中にあったということになるかもしれない。しかし、バタイユはその振り子を再びもとに戻す。1938年３月、「社会学研究会」における発表において、ファシズムが経済的観点から批判される。

「この世界は必要性の世界、軍事的必要性に乱暴に翻訳される経済的必要性に完全に支配された世界であり、またあり続けようとしているのは自明ではないでしょうか」(Hollier［1979：274＝1987：258］)。

1933年から1938年のあいだに何があったのか。その間、フランスではますますファシズムの足音が大きく聞こえるようになっていたのは周知の事実である。一方、バタイユにおいては、決定的な出来事が起こっている。コジェーヴの講義である。バタイユはここで再びヘーゲルに、そして弁証法に出会う。この講義はバタイユにとっては衝撃であった[20]。というのも、バタイユがここで見たのは、異質なもの――ヘーゲル哲学の用語では否定性――が弁証法によってことごとく知――つまり同質性――に組み込まれていくという哲学であったからである[21]。バタイユが実存にとって最も重要と考えた異質なものがこともあろうに知に転化する――したがってここにはファシズムと同じ水路が走っていると言える――。そのような哲学を提示されたバタイユが受け取った衝撃と重圧は計り知れない。ここでバタイユは哲学と経済を結びつける。そうすることによって、異質性≒否定性をすくいあげようとする。バタイユはコジェーヴに送った手紙において次のように言う。

「宗教は否定性を瞑想の対象としています。（中略）芸術作品でも宗教の情緒的要素でも言えることは、否定性が重要な生反応を刺激するものとして実存のあり方に参与する時でさえ、その否定性は「認知され」えないということです。それどころか、否定性は廃棄の過程に組み込まれるのです（ここで、たとえばモースのような社会学者による解釈が私には重要になってきます）」（Hollier［1979：173＝1987：163］）。

カッコに入ってはいるものの、ここにバタイユがヘーゲル哲学をモースの議論につなごうとしている思考が読み取れるであろう。もっとはっきり言えば、哲学、知、理性、そういったものすべてを「消費の概念」で見た贈与と破壊の経済理論あるいはエネルギー論によって読み替えるための一歩がうかがえる。しかしこの手紙では、モースの名前が言及されてはいるものの、自身の存在が「用途なき否定性」、すなわち、ヘーゲルの体系を逃れる否定性であるという哲学的主張が見られるだけである[22]。したがって、人間の意識と経済を結びつけるまでには至っていない。

しかし、その後、バタイユは、39年ごろから書かれたと思われる『有罪者』において次のような議論を組み立てる[23]。

第一に、人間の「行為への投入〔la mise en action〕」という局面がある。そこには、「実用的認識」、「否定性」、「労働、知的、政治的、経済的」といった事象が含まれる[24]。他方で、「疑問への投入〔la mise en question〕」の局面がある。これは「無制限」あるいは「逃げ道のない問いかけの運動」をさけられず、終局には「供犠、笑い、詩、恍惚」へと通じるものである[25]。「疑問への投入」は一時的には「実用的認識」、つまり知を弁証法的に豊かにさせることもある。バタイユはこれを「相互癒着〔interférence〕」と呼ぶ（Bataille［1973b：372＝1992：254］）。しかし、これはいずれ「無限の疑問への投入という弁証法」に巻き込まれる（Bataille［1973b：374＝1992：257］）。そして、最終的には「この問いかけは答えを想定することはできず」、結局、「供犠、笑い、詩、恍惚」へといたる[26]。

否定性、弁証法、といった用語から、この議論の中にコジェーヴ経由のヘーゲルの影響を見て取るのはたやすいだろう。一方、ここで注目すべきことは、バタイユが、労働と認識を――「行為への投入」として――同じひとつのカテゴリーに、そしてまた、供犠と恍惚を――「疑問への投入」として――同じひとつのカテゴリーに入れている、ということである。つまり、「行為への投入」にも意識に関わる要素があり、「疑問への投入」にも行為に関わる要素がある。バタイユはここで意識と行為を同じ地平に置いて議論を組み立てているのである。これはヘーゲル哲学から手に入れた思考に他ならない[27]。

そして、バタイユは「行為への投入」と「疑問への投入」という二つの局面を次のようにまとめる。

> 「行為への投入と疑問への投入とは限りなく対立しあう。一方では、ある閉ざされた体系のためを計っての獲得行為として、他方では、その体系の破滅と均衡喪失として、である」（Bataille［1973b：385＝1992：276-277］）。

意識と行為の区別を取り払ったバタイユは、「行為への投入」を「獲得」と考え、そして、それが「疑問への投入」というさらなる否定の操作に巻き込まれれば「破滅」に至ると主張している。彼はさらに続けて次のように言う。

> 「一般的に見て、疑問への投入は、それが笑いであり、ポエジーであるかぎり、消費行為と、エネルギーの過剰部分の焼尽と平行して進むものである。ところで、生産された（獲得された）エネルギーの総量は、つねに、生産（獲得）のために必要なエネルギーを上回るものだ。疑問への投入は、ある成功した活動への投入の諸成果にかかわる、全面的批判をみちびきいれる」（Bataille［1973b：385＝1992：277］）。

ここには「行為への投入」と「疑問への投入」という双方の領野を、生産と消費という経済論

的視点あるいはエネルギー論的視点から捉える思考が明確にあらわれている。そしてそれゆえ、ここには後に『呪われた部分』において展開される議論、すなわち「普遍経済学」がそのままあらわれていると言えるだろう（Bataill［1976a：42-43＝1973：46-48］）。ただし、上記引用の方が、意識と生産されたエネルギーとの結びつき、あるいは意識を経済から捉える観点がより鮮明となっている。人間は労働し、富と知を豊かにするが、やがては獲得物も知も焼尽されるということである。この局面はやがてバタイユによって「至高性」と名づけられる。そして至高性を経済論・エネルギー論的観点から捉える必要性が、『有罪者』の後にまとめられた「瞑想の方法」――1945年以前に執筆されたと思われる。後に『内的体験』に収められた――においてよりはっきりと説明される。

> 「至高性においては、自律性は逆に保存することへの拒否から生まれ、無際限の浪費から生ずる。至高の瞬間における客体は、それがみずからを滅ぼすという点で、実質ではありえない。至高性は、いかなる点でも、「富」の、実質の、無制限な蕩尽というものと異なることがない。（中略）思惟の諸対象を至高の瞬間に至らしめる術策とは、実際には普遍経済学というものにほかならない。これは、思惟の諸対象の意味を、それら相互の関わりのなかで、最終的には意味喪失との関わりのなかで探る学問だ。（中略）普遍経済学は第一に、余剰エネルギーというものが産出されることを、そしてそれが定義からして活用されえないものであることを明らかにする。余剰エネルギーは、いささかの目的もなしに、したがってどんな意味も持ちうることなく、失われるほかはない。この無益な、無意味な喪失こそが至高性なのである」（Bataille［1973a：215＝1998：408-409］）。

ファシズムへ戻ろう。それは権力や統一化された社会を目指している[28]。そういった点において、ファシズムはバタイユの思考する異質性を十分に解放していない。一方、「同質／異質」という区分にしたがえば、先に見たとおり、ファシズムは下方の異質性を備えている。この観点から見れば、ファシズムとバタイユの思考はつながる恐れがある。問題はここにあった。

しかし、ファシズムの足音を聞きながら、バタイユはヘーゲルとモースを近づけることによって、消費、破壊、焼尽と意味喪失の中での至高性という思考へとたどり着いた。そして、この哲学－経済学－社会学－エネルギー論的観点から見たとき、ファシズムは至高ではない。なぜなら、ファシズムは「経済的必要性に完全に支配され」、それゆえ異質性を「利益にむかってそらせ」ているのだから[29]。そこでは贈与、廃棄、消費、破壊といったものがすべて利益の獲得へとひざまづいているのである。同質性も、それと結びつく優越的な異質性も、そしてまた、それに奉仕する下方の異質性も、利益へ向かう限り、至高ではない。

さらに、利益へ至る「異質性≒否定性」という点から見れば、ヘーゲル哲学も至高ではない。それは否定性を有するものの、「労働の哲学」であるからである。この哲学は生産、獲得、所有

の領野にある。したがって、ヘーゲル哲学はバタイユによって「笑いを廃棄した」哲学と呼ばれる（Bataille［1973b：341＝1992：198］）。バタイユの次の言葉は、ニーチェをファシズムに利用しようとしていたファシストたちに対する批判であるが、それはまた、彼のヘーゲル哲学への判断をあらわしているとも言えるだろう。

「ファシズムに哲学的源泉があるとすれば、それが結びつくのはニーチェではなくヘーゲルである」（Bataille［1970h：454＝1999：37］）。

おわりに

1930年代から1940年代前半にかけて、バタイユの弁証法はファシズムの問題、そしてコジェーヴ経由のヘーゲル哲学、さらにはモースの思想をくぐりぬけ、「普遍経済学」という意識と行為の弁証法的議論へとたどり着く。このものはやがて1949年に発表される『呪われた部分』においてその全貌をあらわすであろう。

翻れば、バタイユはすでに「異質学」において異質なもののひとつに消費という現象があることを論じている[30]。また、異質学における「排出」というキー・ターム自体が消費の含蓄を含んでいる。その意味ではバタイユは初期から普遍経済学的思考を持っている。だが、「異質学」において、消費は異質性の特徴のひとつとしてのみ考えられている。そこで第一に注目されていたのは、同質性に還元不能の異質なものの「排出」であった。しかし、この異質性と消費の包含関係はファシズムの問題とコジェーヴ経由のヘーゲル哲学、そしてモースの理論を通り抜けることによって逆転する。本稿で取り上げたように、1930年代後半から、バタイユの思考は、じょじょに消費あるいは破壊こそが人間にとっての最も重要な事象であり、異質性をそのあらわれのひとつと考える議論へと移行していく。

ただし、バタイユの哲学的、つまり意識にかかわる弁証法は、ヘーゲルが『精神現象学』において示したそれとは異なる。ヘーゲルの弁証法とはあくまでも意味の、あるいは、理性の内部での弁証法である[31]。他方、バタイユの考える自然や物質は「非論理的な差異」（Bataille［1970e：319＝1973：289］）、あるいは「説明不能な差異」（Bataille［1970f：345＝23］）である。したがって、バタイユ的弁証法とは意味と非－意味、理性と理性の外部とを関係付けるものとなる[32]。両者の弁証法の差異は明らかであろう。では、バタイユの思考した弁証法とは、ヘーゲルの弁証法を包み込んだ弁証法となるのだろうか。おそらくそれは不可能であろう。無意味のものが弁証法の運動と関わることはできないだろうから。もし、無意味のものが意味を持ったならば、それはもはやバタイユ的弁証法とはならないであろう。ということは、バタイユ的「弁証法」はありえないのではないだろうか。すでに指摘したように、コジェーヴの講義を知った後、1937年にバタイユは自身の考える否定性を「用途なき否定性」と呼ぶことになった。この時、バタイユはこの否

定性がヘーゲル的弁証法の内部には存在できないことを知っていたはずである。

にもかかわらず、バタイユはそれを「弁証法」と呼ぶ[33]。ここに新たな問題がある。しかしそれは本論の射程を超えている。その問題については稿をあらためて論じることになるだろう。

註

（1）バタイユとグノーシスについての詳細は、酒井［2009：38-89］を参照のこと。

（2）これはブルトンへの批判を多分に含んでいた。詳しくは、Surya［1992：147ff = 1991（上）：155ff］、そして吉田［2001a］、特に第Ⅰ章を参照のこと。

（3）邦訳書『純然たる幸福』p.451 訳注（1）を参照のこと（Bataille［1970d = 2009］）。

（4）バタイユはこの頃を回想して「私は同世代の多くの人と同じようにマルクス主義に傾斜する運命にあった」（Bataille［1976e：563］）と述べている。

（5）それゆえエンゲルスにとっての「自然」とは「いかなる理性的発想にも一見閉ざされているように見える領域」と映っていた（Bataille［1970d：279 = 2009：276］）。

（6）「マルクスとエンゲルスによって、突如として弁証法の基底となった自然という要素は、弁証法を応用していくにあたり、理論面だけでなく実践面においても最も多大な抵抗を示した要素だった」（Bataille［1970d：280 = 2009：277］）。

（7）「父親と息子のテーマによっても次のことが明らかとなる。すなわち自然に対して真の断絶を示している領域においても、自然はまだ姿を消してはいなかった」（Bataille［1970d：288 = 2009：291］）。

（8）異質学の構築の背景については、吉田［2001a：59-81］を参照のこと。

（9）詳しくは以下のバタイユの説明を参照のこと。「性的な活動、異性を前にした態度、糞便、尿、死、死体（中略）を前にしての祭儀、さまざまのタブー、儀礼としての人肉食、神と見なされる動物を供犠に捧げること、生肉を食すること、特権的な笑い、啜り泣き（一般的には死を対象とする）、宗教的恍惚、糞便と神と死体に関する態度が同じであること、どうしようもない脱糞をしばしば伴う恐怖、化粧し高価な宝石や輝く装身具をまとうと女は輝かしくもまた淫蕩にもなるというありふれた出来事、賭事、止めることのできない浪費、そして金を突拍子もない用途に使うこと…こうしたことは、活動の対象（排泄物、性器、死体など）が、常に違和的物体［das gantz Anderes］と見なされているという意味で一つの共通する性格を示している。つまり、この対象は、肉体および精神を完全に多少とも暴力的な排出（あるいは射出）の状態におきたいという欲望の中に吸収されるものであるが、同じく、それはまた容赦ない破断の結果としても排出されるものであるという意味で、一つの共通する性格を示しているのである。違和体（異質なもの［hétérogène］）という概念のおかげで、排泄物（精液、経血、尿、糞便）と聖別され、神的で、驚嘆すべきと見なされてきたすべてが主観的には基本的に同一であることを明らかにできるだろう」（Bataille［1970i：58-59 = 2001a：248］強調はバタイユ）。

（10）吉田［2001a：15-81］を参照のこと。

（11）吉田［2001b：121-190］、Heimonet［1990：63-80］を参照のこと。

（12）「ファシズムの指導者たちは間違いなく異質的な存在に属している」（Bataille［1970f：348 = 2001b：28］）。

（13）すぐ後に述べるように、1935 年からブルトンと結成した団体「コントルアタック」の活動の末期、バタイユはブルトンらに「シュルファシスト」と呼ばれることになる。以下を参照のこと。「「コントルアタック」のグループに参加しているシュルレアリストは、同グループの解体を満足の念とともにここに認める。同グループの内部には「シュルファシスト」と呼ばれる傾向が現れ、そのきわめてファシスト的な正確は次第に顕著になっていった」。この文章はバタイユ著作全集第一巻の巻末の「Note」672 頁に収められている。また、日本語訳は、吉田［2001a：145］、を参照のこと。

（14）「バタイユは、ファシズムの正体を精神分析に基礎をおく概念装置を用いて解明しようとしたフランス

で最初の、そしてただ一人の人間だった」（Surya［1992：216 = 1991：229］）。

（15）1931 年から 1934 年まで民主共産主義サークル。1935 年から 1936 年コントルアタック。1936 年雑誌「アセファル」創刊（1939 年 6 月号まで）。1937 年秘密結社「アセファル」結成。同年「社会学研究会」結成（1939 年 7 月まで）。同年「集団心理学会」設立。

（16）注（13）参照のこと。

（17）「サドの使用価値」においてはヘーゲルには触れられていない。「ファシズムの心理構造」においてはイデアの問題に言及する時（Bataille［1970f：362 = 2001b：51］）と国家の問題に言及する時（Bataille［1970f：364-366 = 2001b：55-59］）にヘーゲルの名前が持ち出されている。しかし、そこでヘーゲル哲学についての深い言及はなされていない。

（18）次の説明を参照のこと。「事実、もっとも普遍的なかたちで、単独であれ集団であれ、人間はたえず消費プロセスのうちにとらわれている」（Bataille［1970e：319 = 1973：288］）。

（19）他方、「ファシズムの心理構造」においては一度だけ、「非生産的消費」という用語が利用される（Bataille［1970f：346 = 2001b：25］）。そして、バタイユはそこに脚注を挿入し、「ジョルジュ・バタイユ「消費の概念」、「社会批評」第 7 号（1933 年 1 月）参照」と記している。このことは、バタイユがファシズムを消費の観点から捉えようとしていたことをうかがわせる。また「ファシズムの心理構造」において「社会的同質性の基盤は、生産である」とも述べられている（Bataille［1970f：340 = 2001b：14］）。しかし、ここでは「異質／同質」の枠組みを主要概念としているため、普遍経済学の視点が前には出てこない。つまり、焼尽と至高性との結びつきが明確になってはいないのである。おそらく、そのためにはコジェーヴ経由のヘーゲル哲学を待たねばならなかった。

（20）コジェーヴの講義についてバタイユは以下のように回想している。

「私は 33 年（と思う）から 39 年まで、アレクサンドル・コジェーヴが『精神現象学』の解説をおこなった講義に出た（本の流れに沿ったその解説は天才的なものだった。講義がおこなわれた小さな教室から、クノーと私が息詰まる思いで――息詰まり、しびれたようになって――出たことが何度あっただろう）。同じ時期に多くの本を読んでいた私は、諸科学の動向に通じていた。しかしコジェーヴの講義によって私は幾度となく打ち砕かれ、粉砕され、抹殺された」（Bataille［1973c:416］）。邦訳は Hollier［1979: 215 = 1987：217］参照。

（21）コジェーヴによる次の説明を参照のこと。

「人間的実在の源泉かつ根源は無である。すなわち否定性という威力である」（Kojève［1947：574 = 1987：422］強調はコジェーヴ）。

「人間という無を存在の中に維持する威力が有する弁証法的運動、――これが歴史であり、しかもこの威力自体、否定的、創造的行動となって実現され顕在化される。すなわち、この行動とは、人間それ自身というこの所与を否定する行動、或いは歴史的人間を創造する闘争という行動であり、動物の生きる自然的世界という所与を否定する行動、或いは文化的世界を創造する労働という行動である」（Kojève［1947：575 = 1987：423 − 434］強調はコジェーヴ）。

「存在論的次元において、否定性は（中略）否定活動もしくは創造活動として現実化され、形而上学的次元においては「人間の真の存在がその行動であり」、ただこの行動においてのみ「個体性が客観的に実在する」（中略）。最後に、現象学的次元においては、闘争という行動によって初めて人間が自然的「現象」の世界に自己を「顕在化」せしめ、労働という行動の後に悟性がその思惟と言説とを従えてこの世界に「現れる」のであった」（［Kojève［1947：547 = 1987：384］強調はコジェーヴ］）。

これらから、人間とは自身の死という否定性を否定する労働という行為の渦中において悟性と文化を発展させる、というコジェーヴ＝ヘーゲルの思考が読み取れるであろう。これはすなわち、否定性が知、技術、生産物等々に転化されるということを意味している。

（22）この手紙全文を参照（Hollier［1979：170-177 = 1987：160-168］）。

（23）先に取り上げたコジェーヴへの手紙は一部改定され「ヘーゲルに関する講義の担当者 X への手紙」と題され、この著作の中に所収されている。

Cf. Bataille［1973b：369-371 = 1992：249-253］。

(24) Bataille［1973b：372-373 = 1992：254-255］、Bataille［1973b：384 = 1992：274］を参照のこと。「行為」とはコジェーヴ＝ヘーゲル哲学の根幹となる概念である。それは労働によって知を豊かにする局面を示す概念である。
次のコジェーヴの説明を参照のこと。「労働こそが、自然的世界とはまったく異なったものでありながらこの自然的世界に現存在する概念を生み出す」（Kojève［1947：377 = 1987：210］）。
「思考、そして、現実を明示する言説は否定する〈行動〔l'Action〕〉から生まれる」（Kojève［1947：550 = 1987：387］）。また注（21）も参照のこと。
バタイユは、「行為」の世界をもたらす契機が言語であることを指摘している。バタイユによる次の説明を参照のこと。「非現実のなかへのこうした〔神や理性という〕存在の侵入は、生の直接性に言語が入れ替わることから起こるのはたしかだ。人間は現実の諸事象を、またおのれ自身を、それらを喚起し、意味し、意味された事象の消滅の後にまで生き残ることばによって、二重化した。これらのことばは、そんな風に操作されると、それ自身でひとつの王国を形づくり、ことばによって正確に翻訳された現実に、もろもろの質の、非現実的存在の純粋な喚起をつけ加える。この王国は、直接的存在が感性的意識である限り、存在を代行するものとなった。事物についての、おのれ自身についての無定形の意識に、反省的思考が入れかわり、その反省的思考の中では、意識が、ことばを以て事象に変えたのである。だが、意識がゆたかなものになると同時に、ことばが――非現実の、あるいは現実の存在の喚起が――感性的世界の地位を占めるに至ったのだ」（Bataille［1973b：379 = 1992：265-266］〔　〕内引用者による補足）。
「しかし、非現実性という点そのものによって、思考としての、つまり、存在の形式としての言語の展開は、必然的に弁証法的である。言語の諸命題はある矛盾した方式で作り出される。すなわち、それらの命題の不動性は現実物から遠ざかり、ただそれらの矛盾した展開のみが、現実物にかかわるチャンスを得るのである。ただ、一個の「弁証法」のみが、言語を――あるいは非現実の王国を――その言語が喚起する現実へ従属させるだけの力を持っている」（Bataille［1973b：379 = 1992：266］）。

(25) Bataille［1973b：372-373 = 1992：254-255］、Bataille［1973b：384 = 1992：274］を参照のこと。

(26) Bataille［1973b：373 = 1992：256］、Bataille［1973b：385 = 1992：276］を参照のこと。

(27) 注（24）を参照のこと。ヘーゲルにとっても「労働」と「知」は「行為」という同一の局面にある。バタイユはこの思考を受け入れ、かつ、それを「焼尽」する局面を思考したと言えるであろう。

(28) たとえば、以下の説明を参照のこと。両者ともバタイユの捉えたファシズムを分析している。
「ファシズムは共同性から生み出される力を一人の首長に委託し、権力として自己を固定するという構造を持った」（Galleti［1999：= 2006：491］訳者解説）。
「ファシズムにおいてこうした力、こうした暴力が奉仕するのは、死せる神の替え玉の周囲に固着する獰猛なまでに統一的な社会である」（Surya［1992：293 = 1991（下）：24］）。

(29) 1938 年 2 月、バタイユは病気のカイヨワに代わり「社会学研究会」において権力についての発表を行っている。バタイユはそこで軍隊と宗教性がむすびついた権力を説明する際に次のように言う。「権力はそれが要求した力を利益にむかってそらせ、悲劇から逃れるのです」（Hollier［1979：246 = 1987：231］）。ここでバタイユが言う「悲劇」とはほぼ「至高性」の意味に当たる。「悲劇」に関しては、Hollier［1979：268-290 = 1987：253-273］を参照のこと。

(30) 注（9）で引用したように、異質なもののひとつとして「止めることのできない浪費」という事象が挙げられている。また、同論文「サドの使用価値」においてバタイユは「生産」と「消費」について次のような説明も行っている。「このような〔同質性の〕表象は、私たちが生きている宇宙から、私たちを昂揚させる源泉となるすべてを、あらん限り奪い取り、もっぱら生産と合理的な消費と産品の保存に適合した。従属を本性とする類の人間を発展させることを常に目的としている」（Bataille［1970i 62-63 = 2001a：255-256］〔　〕内は引用者による補足）。

(31) 次のデリダの説明を参照のこと。「ヘーゲルの言う Aufhebung は、一から十まで完全に、言説、体系、ないしは意義の労働の内部で生じる。ひとつの限定が、その真理を明らかにするもうひとつの限定によって否定され、かつ保持されるのだ。非限定から限定への無限の繰り返しが限定から限定へと進行し、

無限についての不安から生じたこの移行自体が、意味を連繋せしめる。それがAufhebungなのであって、これは絶対知の円環内に含まれており、おのが領域を超え出ることはけっしてなく、言説、意味、労働、法則などの全体性を中断せしめることもない」（Derrida［1967：405 = 1977-1983（下）：205］）。

(32) 次のデリダの説明を参照のこと。「『至高性』のエクリチュールは、あらゆる意味素、つまりは哲学素を、至高作用へ、意味の全体性の回復なき消滅へと関連づける」（Derrida［1967：396 = 1977-1983（下）：195］）「『至高性』のエクリチュールは、言説を絶対的な非＝言説との関係状態に置く」（Derrida［1967：397 = 1977-1983（下）：195］）。

(33) バタイユは『エロティシズム』の脚注において、禁止と違犯の関係を理解するためにヘーゲルの「弁証法」を参照するよう示唆している（Bataille［1987：39 = 2004：471］）。しかしデリダはこれを受けて「バタイユは自分で思っているよりはるかにヘーゲル的ではない」と指摘している（Derrida［1967：405 = 1977-1983（下）：205］）。

引用参考文献

（邦訳のある文献の場合、本文中の引用箇所については一部変更したものもある）

Bataille,G. 1970a ‘Le langage des fleurs’ in *Œuvres complètes*〔以下「*O.C.*」と略記〕*I*, Gallimard, pp.173-178（＝1974　片山正樹訳「花言葉」、『ドキュマン』、二見書房、36-46 頁）.

――――1970b ‘Le gros orteil’ in *O.C. I*, Gallimard, pp.200-204（＝1974　片山正樹訳「足の親指」、『ドキュマン』、二見書房、71-79 頁）.

――――1970c ‘Le bas matérialisme et la gnose’ in *O.C. I*, Gallimard, pp.220-226（＝1974　片山正樹訳「低俗唯物論とグノーシス派」、『ドキュマン』、二見書房、98-110 頁）

――――1970d ‘La critique des fondements de la dialectique hégélienne’ in *O.C. I*, Gallimard, pp.277-290（＝2009　酒井健訳「ヘーゲル弁証法の基底への批判」、『純然たる幸福』、ちくま学芸文庫、273-293 頁）.

――――1970e ‘La notion de dépense’ in *O.C. I*, Gallimard, pp.302-320（＝1973　生田耕作訳「消費の概念」、『呪われた部分』、二見書房、261-290 頁）.

――――1970f ‘La structure psychologique du fascisme’ in *O.C. I*, Gallimard, pp.339-371（＝2001b　吉田裕訳「ファシズムの心理構造」、『物質の政治学　バタイユ・マテリアリストⅡ』、書肆山田、13-71 頁）.

――――1970g ‘Contre-Attaque, Union de lutte des intellectuels révolutionnaires’ in *O.C. I*, Gallimard, pp.379-383（＝2001b　吉田裕訳「コントルアタック　革命的知識人闘争同盟」、『物質の政治学　バタイユ・マテリアリストⅡ』、書肆山田、117-125 頁）.

――――1970h ‘Nietzsche et les fascistes’ in *O.C. I*, Gallimard, pp.447-465（＝1999　兼子正勝・中沢信一・鈴木創士訳、「ニーチェとファシストたち」、『無頭人（アセファル）』、現代思潮社、27-61 頁）.

――――1970i ‘La valeur d’usage de D.A.F. de Sade（1）’ in *O.C. II*, Gallimard,pp.54-69（＝2001a　吉田裕訳「サドの使用価値」、『異質学の試み』、書肆山田、240-269 頁）.

――――1973a *L’expérience interiuere*, in *O.C. V*, Gallimard, pp.7-190（＝1998　出口裕弘訳『内的体験』、平凡社ライブラリー、9-366 頁）.

――――1973b *Le coupable : La somme athéologique I*, in *O.C. V*, Gallimard, pp.235-392（＝1992　出口裕弘訳『有罪者　ハレルヤ』、現代思潮社、1-290 頁）.

――――1973c *Sur Nietzsche—La somme athéologique II*, in *O.C. VI*, Gallimard, pp.7-206（＝1992　酒井健訳『ニーチェについて』、現代思潮社）.

――――1976a *La part maudite*, in *O.C. VII*, Gallimard, pp.17-179（＝1973　生田耕作訳『呪われた部分』、二見書房）.

――――1976b *L’histoire de l’érotisme*, in *O.C. VIII*, Gallimard, pp. 7-165（＝1987　湯浅博雄他訳『エロティシズムの歴史』、哲学書房）.

――――1976c *La souvereineté*, in *O.C. VIII*, Gallimard, pp.243-456（＝1991　湯浅博雄訳『至高性』、人文書

院).
――――――1976d 'Le paradoxe de la mort et la pyramide' in *O.C.Ⅷ*, Gallimard, pp.505-520（＝1973　山本功訳「死の逆説とピラミッド」、『神秘／芸術／科学』、二見書房、99-132 頁).
――――――1976e 'Note—Confrénce 1951-1953' in *O.C.Ⅷ*, Gallimard, pp.558-592.
――――――1987 *L'érotisme*, in *O.C.X*, Gallimard, pp.7-270（＝2004　酒井健訳『エロティシズム』、ちくま学芸文庫).
――――――1988 'Hegel, la mort et le sacrifice' in *O.C.XII*（articles Ⅱ, 1950-1961), Gallimard, pp. 326-345（＝1994　酒井健訳「ヘーゲル、死と供儀」、『純然たる幸福』、人文書院、168-200 頁).
――――――1993［1979］a *Lascaux*, in *O.C.IX*, Gallimard, pp. 7-101（＝1975　出口祐弘訳『ラスコーの壁画』、二見書房).
――――――1993［1979］b *La littérature et le mal*, in *O.C.IX*, pp. 169-316（＝1992　山本功訳『文学と悪』、筑摩書房).
Derrida, J. 1967 *L'Ecriture et la difference*, Seuil（＝1977-1983　阪上脩他訳『エクリチュールと差異』（上・下)、法政大学出版局).
Galleti, M. 1999 *L'apprenti sorcier, testes, letters et documents*（*1932-1939*), Editions de la Difference（＝2006　吉田裕他訳『聖なる陰謀』、ちくま学芸文庫).
Heimonet, J-M. 1990 *Négativité et Communication*, Editions Jean-Michel Place.
Hollier, D.1979 *Le collège de sociologie*, Gallimard（＝1987　兼子正勝・中沢信一・西谷修『聖社会学』、工作舎).
Kojève, A. 1947 *Introduction à la lecture de HEGEL, leçon sur la phénoménologie de l'esprit professés de* 1933 *à* 1939 *à l'Ecole des Hautes Etudes, réunies et publiées par Raymond Queneau,* Gallimard（＝1987　上妻精・今野雅方訳『ヘーゲル読解入門』、国文社).
Macherey, P. *A quoi pense la literature*, Presses Universitaires de France, 1990（＝1994　小倉孝誠訳『文学生産の哲学』、藤原書店).
Surya M. 1992［1987］*Georges Bataille, La mort à l'œuvre*, Gallimard（＝1991　西谷修・中沢信一・川竹英克訳『ジョルジュ・バタイユ伝（上・下)』、河出書房新社).

酒井健　2009『バタイユ』、青土社 .
吉田裕　2001a『異質学の試み　バタイユ・マテリアリストⅠ』、書肆山田 .
吉田裕　2001b『物質の政治学　バタイユ・マテリアリストⅡ』、書肆山田 .